

剛速球で

薄葉

茂宮城

石鳥居に刻まれてあるわが祖父の肩書き永久に神社委員長
境内に榊を植ゑしわが祖父は旧三神村神田かんだの生まれ
めらめらと正月飾りの燃えあがる爽快感を時に怖れる
どんと祭の火柱見ずに大寒を迎へる年は心せつなし
一六〇キロの剛速球で大金を賽銭箱に投げたり夢で

遠足のごと

伊沢

玲千葉

恋人と暮らす小さな部屋を決め遠足のごと子を出てゆけり
下の子も家を離れてゆきにけり呵呵と晴れたるあをぞら残し
子が置いてゆきたる書架の卒アルや学習図鑑に冬の陽しろし
溜め息はなんの足しにもならなくてむしろやさしい引き算に似る
沈めても沈めてもすぐ浮かびくる湯ぶねの柚子にあそんでもらふ

ポップコーン

小倉

敬*神奈川

巻き上げてゆくブラインド 残業のなごりのカップへ朝日はとどく
婉曲に遠ざけられて始まりし会議の声がよく届くなり

さあ今年最後だ、よおく観てくれと丸く大きな月のほり来る

映画ならやっぱり笑えるやつがいいポップコーンが弾むくらの

へ大気圏、突入します！〜号令の途中で尽きている流れ星

荷造り

浅田 みどり* 東京

ああこの年も終わりたり薄紅の「もつてのほか」を食べることなく
柿、大根、白菜、白米整然と荷造りされて宅急便来る
荷造りで片付け上手がよくわかる美しくぞあらん光さんの畑
「いいおしめりでござんした」村人の声が聞こえき時雨の後に
人ならば行列のあり 名店にケーキ買う列、炊き出しの列

龍の気配

池田 恭子 東京

楽の無き舞台をあゆむ舞ひ人の足さばくたび絹の鳴る音
源氏の君舞ひたると言ふ春鶯囀千年へだて今われら見る
青海波また春鶯囀 いにしへの春の内裏に迷ひ込みたり
龍笛の響きするどく駆け上がり舞ひ人ダンと床を鳴らせり
サントリーホール出づれば雨やみて飛び去りし後の龍の気配す

空想の犬

内山 真由美 新潟

明日から大雪だとは思へない青空の下買ひ出しに行く
両の手でぐいと引いた綿のごと覆ふ雪雲凍てるふるさと
母われのスキーウエアを身にまとひ滑るわが子が分身めきぬ
はんぶんは夫由来のDNA子にあれこれと言ふのをやめる
空想の犬を引き連れ散歩するわれに気づくか本物の犬

「女時」とは

齊 藤 淳 子 長 野

飛んできて何も語らぬ隣国のミサイルに海が汚されてゆく
謎多き世に生まれきて四歳が「なんでなんで」と唱へ始める
ピンコロで逝くのがよいとちちははの言ひ合ふよこで蒟蒻突つく
「女時」とは不名誉きはまりなき言葉ジェンダー論をつきつめるとき
冷蔵庫なんども開けてなんども物忘れして年改まる

青空ノート

藤 田 倫 夫 三 重

この一歩、この動作から今年なり日の出の前のカーテンを開く
書店無く文具店消ゆふるさとはされど青空ノートが展く
アメンボは水より淨く生くるゆゑみづに染まらずけて沈まず
かるやかに回るときあり凍てる地に停まる日のありわが生よは車輪
たのしげに輪を描かくのではありません鳶は愁ひて（核）を観てゐる

刃物ミュージアム

田 中 泉 大 阪

あをぞらに思ひ描けりそのかみの堺に着きしオランダ船を
目を開けて寝てゐる刃物ならびたり真昼の（刃物ミュージアム）には
ゆるやかにカーブしてゐる刃の厚し 巻き寿司を切るための包丁
ともだちは手をつなぐ人、すりむけばばんさうかうをすぐくれる人
「子どもにしか、できないこともある」と言ふ災害救助になひし人は

妻の自慢

鮎川 清 山口

菩提寺の晋山式に列席す稚児行列も楽しみにして
百人のスキンヘッドが天を衝く参列僧侶の記念撮影
出生数が激減したる丙午昭和四十一年のこと
丙午に敢へて出産したること妻の少なき自慢の一つ
幼時より競争少なき環境にのんびり育ち息子五十六

ぼんかん

浅野 千 里 香川

朝の日に解けてゆく霜 里山は淑気ただよひ卯年はじまる
九十年使へる母の両腕にふはり抱かれみどりご眠る
はつぞらに凧たこ揚がれをさなごは声はづませて風に駆けゆく
戸外より持ち来しぼんかん冷たつめた緊まりある実に甘さみなぎる
ぼんかんは物語せり印度より旅し蜜柑と結ばれたりと

食卓明る

大 西 晶 子 福岡

年かはるこの夜の月は八日月餅つくうさぎを容れるに小さし
冷凍の餅を取り出し解かしおく雑煮を食べる人数分を
焙じ茶を旨いと飲む子がまへに居て食卓明る帰省二日目
きのふけふ似たやうな雲が浮かぶけどけふは今年できのふは去年
本当にできるだらうか要介護四の夫の家での介護